

与兵衛長屋つれあい帖

～お江戸ふたり暮らし～

かずえ Kazue



アルファポリス文庫

<https://www.alphapolis.co.jp/>

目次

序章	5
ふたり暮らし	9
絵師の嫁取り	165
長屋番	269
終章	361

序章

夜明けの早い季節は、人々の目覚めも早い。明け六つ（午前六時）に大家が長屋木戸ながやききどの鍵を開けると、棒手振り達ぼうてふりがすぐに声を上げて姿を見せた。長屋のあちらこちらで米を炊く煙が上がり、井戸端は、顔を洗ったり水を汲んだりする人で大賑わいだ。江戸の町は、今日も人で溢れている。

季節は夏の終わり。明け方の気温は低く過ごしやすい。ここ数日は人死にもなく、近隣での火事の報も聞かず、誰かが産氣付いたとも聞かない。嫁入りの話も嫁取りの話も聞かなかった。

「与兵衛長屋は今日も事なし、と」

長屋木戸ながやききど近くのひとり住まいの部屋から出て辺りを眺めたおかめは、少し曲がり始めた腰をゆっくりと伸ばした。忙しくしたい訳ではないが、なんの変化も無い毎日はずっと退屈である。

「おはよう、おかめさん。何か困ってる事はない？」

同じ長屋とはいえ、住んでいるのは七つ並んだ部屋の端と端。部屋の位置が離れているはずのおとみが、今日もひよっこりと顔を出した。お節介な事だ。

与兵衛長屋はいわゆる九尺二間くじく二けん（間口九尺（約二・七メートル）、奥行二間（約三・六メートル））の裏長屋である。ひと棟に壁を隔てて部屋が並んでいるのだ。向かい側の棟と合わせて十四ある部屋の住人達で、口うるさいおかめにわざわざ声を掛けてくる者はほとんど居ないというのに。その上、わざわざ声を掛けたって、おかめの返事はいつも同じなのだ。

「ないよ。人をあんまり年寄り扱いしないでくれ」

「あはは。今日も元氣ぞうだ。何かあったらすぐに言ってくださいな」

うるさいねえ、と思ったり、有り難い事だと思ったりする。

おとみは、昨年暮れに一人息子を病で亡くしてからしばらく表に姿を見せずにいた。こうしてまた、うるさいと思えるほどになったのだから何よりだ、とおかめはこつそり息を吐く。子どもが親より先に逝くのを見るのは、何度経験しても慣れる事はない。大家に頼まれ、木戸辺りにいて長屋に出入りする人々を監視しているおかめは、忙しなく出入りする棒手振り達ぼうてふりに目を走らせながら、一日分の米を研ぎ火に掛けた。

この時間は忙しい為、おとみが汲んできてくれた井戸水を有り難く使わせてもらう。一人分の米は量も大した事はなく、火を使うのが勿体ない様な心地さえするが、食事を疎かにする訳にはいかない。

おかめはまだ、生きる事に飽いてはいないのだ。

包丁を出すのが面倒になり、味噌汁には、通りすがりの豆腐売りを捕まえて買った豆腐を崩して放り込んだ。後は漬け物でもあれば充分。

洗濯は、人の出入りがひと段落ついでからすれば良いだろう。じきに、男衆は仕事に出掛け、子ども達は寺子屋てらこやへと駆け出して行くに違いない。

与兵衛長屋に、いつも通りの朝が来ていた。

ふたり暮らし

一 出会

おみつは曇り空を見上げて、急がなくちやなあ、と溜め息を吐いた。頼まれていた縫い物を馴染みの呉服屋に届けた帰り道である。齡十のおみつには、なかなかの距離だった。住んでいる長屋までは、もう少し時間がかかる。

仕上がった品は届けたけれど、次の頼まれ物の布地を預かっているのだ。雨が降って濡れると、乾かす所から作業しなくてはならず面倒である。

本当は、蕎麦でも食べて帰ろうかと思っていたけれど……

道ばたに居並ぶ屋台を見ながら、おみつは久しぶりに空腹を感じていた。

外歩きは何日ぶりだろう。喪中だからといつまでも籠ってられないのは、おみつが一人ぼっちになってしまったからだ。

十日前に、母が亡くなった。ほっそりとした人であったが、縫い物の仕事でしっかりと稼ぎ、おみつとのふたり暮らしを楽しんでいた。物心ついた時には父は居なかつたので、おみつはずうっと母とふたり暮らしだった。

おみつが寺子屋に行っていた間に、一人出掛けていて転んだのだと聞いた。軽く見

ていた傷に悪いものでも入り込んだのか急に具合が悪くなって、あれよあれよと言う間に寝込んでしまい、一月経つ頃に、ぼっくり逝ってしまった。

ちようと、お隣の留吉とおとみの夫婦が、昨年亡くした息子の初盆で忙しかったのも運が悪かった。呆然としているおみつをおとみが見つけてくれた時には、おみつの母は呼吸が止まっていたのだ。

その後、長屋の者総出で葬儀をしてくれて、あれやこれやと世話を焼いてくれた。おみつが、夢か現かと思っている間に母の遺体は片付けられて、位牌とお骨になって部屋の隅に置かれていた。

うちへおいで、と言ってくれる留吉とおとみへ断りを入れ、おみつは一人、必死で母の仕事の残りを片付けた。縫い物の腕は母譲りで、大抵の技は仕込まれているし、しょっちゅう手伝っていたのでやり方は分かっている。

もしも、品物の出来が悪かったら、店の方で気付いて金子が引かれるだけだろうと届けてみれば、いつも通りに受け取ってもらえた。次の依頼もされた。

母の手伝いで届けたと思われたのか、ひとりで偉いねえ、とお駄賃までつけてくれたのだ。子どもが縫っていると知られると足元を見られるかもしれないので、おみつは曖昧に笑って、頷いて、いつも通りに店を出た。

また、宜しくお願いします、と言って。

そうして、ほっとして歩いて歩いてみれば、久しぶりに空腹を感じたのである。世話焼きのおとみから届く握り飯をなんとか口にしていたが、大して味は感じなかった。食べないとおとみに叱られるから食べていただけ。しかし今、空腹を感じている。

母と二人で、届け物の帰りによく蕎麦を食べた。

『おみつが十になつたら、天ぶらを食べようねえ』

『おっ母さん、なんで十になつてからなの？』

『揚げ物は、小さい子どもの体に良くないって聞くからね。もう少し大きくなつたらが良いかと思って』

母と交わした会話を思い出すと、自然と涙がこぼれた。

まだ、二人で食べていないのに。

良い匂いの中を空腹を抱えて歩きながら、おみつは涙を拭く為に少し道の端に寄って立ち止まった。おみつがうつむいて、ごしごしと乱暴に涙を拭っていると、座り込んでいる子どもが目に入った。

じつとこちらを見てくるのが気恥ずかしくて視線を逸らしかけ、もう一度、子どもを見る。着物も、顔も手も足も、煤で汚れているのかあちこち黒くなっていた。疲れた様に座っているのに、おみつを見る目付きは鋭い。

火事で親とはぐれたのかな、とおみつは思った。よくある事である。江戸は、とか

く火事が多い。焼け出される人は、あちらこちらに見られる。

けれど、ここ数日で、この近辺での火事の話は聞いていなかった。ぼんやりしていいおみつが、聞いていなかっただけかもしれないが。

それにしても、放つたらかしにされているのも珍しい。火事に慣れた江戸の人は、焼け出された者どうし助け合って、すぐに新しい住みかを見つけたり、親をなくした子どもの引き取り手を探したりと素早く動く。無事だった近くの寺や神社が炊き出しも行おうし、こんな所で煤にまみれて座り込んでいるなんて、そうそうありはしないのだ。おみつは子どもの隣に座り、照れ隠しに話し掛けた。

「私、泣いてないよ」

子どもは、吃驚した顔をしてから、少し笑った。

「そうか」

割と大人びた返答がきて、今度はおみつが吃驚する。近所の幹太なら、嘘つけ、泣いてたじゃねえか、やーい泣き虫、とここまでひと息で言ってきただろう。

少し悩んだ子どもが頷いてくれたので、おみつはえへと笑った。

それから、子どもに手を差し出した。汚れるからと遠慮する手を、涙を拭った手拭いでごしごしと拭く。

「作次郎」

不意に子どもが言った。お武家さんっぽい名前だなあ、と思いながらおみつは、私
はみつだよ、と返事をした。

二人は手を繋いで、一番近くにあった蕎麦屋の屋台で蕎麦を一杯注文した。気の良
い蕎麦屋の主人は、少し多めに蕎麦を盛って箸を二膳付けてくれた。

共に食べた一杯の蕎麦は、久しぶりにおみつの口の中に、美味しいという感覚を思
い出させてくれた。

「さ、帰ろ」

二人で仲良く蕎麦を食べ終えると、おみつはそう言って作次郎にまた手を差し出し
た。雨の降りそうな雲が、ますます低くたれ込め始めている。

「え？」

驚く作次郎の手を構わず握ると、ご馳走さまと蕎麦屋の主人に声を掛けた。

「おう。降りそうだな。気をつけて帰んな」

「ありがとう」

そうして、おみつは急ぎ足で歩き出した。何も言わない作次郎の手を引いて、帰り
道を歩いた。雨が降る前に帰ろうと、ただそれだけを考えて歩いていった。

まだまだ暑い季節に、温かい蕎麦を食べて早足で歩いてきたものだから汗だくだ。
背負った荷物も重たかった。それでも、おみつは足を止めなかった。

長屋木戸をくぐった所でおかめに話し掛けられて、ようやく足を止めた。

「おみつちゃん、おかえり。遅かったねえ」

「おかめさん、たがいま。お蕎麦を食べてきたの」

おかめは、いつも長屋木戸の辺りに居る年寄りの女だ。連れ合いと一人息子を流行
り病で亡くしてからは、ずっと一人で与兵衛長屋に住んでいる、らしい。

いつも、与兵衛長屋の出入り口辺りに居る。おみつが物心ついた時にはそこに居た
し、とつくに年寄りだった。

おかめは長屋の出入りの度に声を掛けてくるので、そういうものなんだなおみつ
は思っていたが、あれやこれやと詮索してきて五月蝍いと言っている声もよく耳にし
た。主に子ども達の声だ。

おかめさんはあれがお勤めさね、と大人達は言っていて、それを聞いたおみつは、
そういうお勤めもあるのかと思っただけだった。

おかめが、見知らぬ者が入り込まないか、長屋の住人に異常はないかと思張りの役
目をしているのだという事まではまだ気付いていないおみつは、ただ、ただいまと挨拶
をした。

「そうかい。雨が降る前で良かった。それで、その子は？」

「作次郎だよ」

おみつはただ、知っている事を告げる。
作次郎はおみつに手を繋かれて、なんだかぼかんとした顔で立っていた。
作次郎をじろじろと上から下まで眺めたおかめは、質問を重ねてくる。

「それで、作次郎をどうするんだい？」
「ああ。一緒に暮らそうかと思って」

おみつがすらすらと答えると、おかめは驚いた顔でおみつを見た。作次郎もまた、吃驚した顔でおみつを見ていた。

あれ？とおみつは作次郎が驚いた事に驚く。

さつき、帰ろうと声を掛けた時に作次郎が驚いていた事には気付いていたが、結局ここまで手を振り払われる事なく歩いてきたものだから、一緒に暮らす事に作次郎も納得してくれたのだ、とおみつは思っていたのだ。

作次郎の反応におみつが困っていると、気を取り直したおかめが作次郎に聞いてくれた。

「作次郎は、どうなんだい？ これまでの家は何処だい？」

「……無い」

作次郎は、ぼそりと答える。

「火事か。えらい煤すすけておるが」

作次郎は、おかめと目は合わせずにこっくりと頷いた。目を眇すかめたおかめは少し間をおいてから、ふんと鼻を鳴らした。

それから、二人を追い払う様に手を振って言った。

「なら、まずは湯屋ゆやにでも行っておいで。二人とも、酷い有り様だよ」

「うん」

おみつは、すたすたと自分の家へ向かって歩き出した。ずっと作次郎の手は離さなかった。作次郎も、その手を振り払う事なく付いてきたから、やはりこれで良いんだろうと気を持ち直した。

「お武家さんの子は厄介だ」

眉をしかめたおかめの眩きは、二人の耳には届かなかった。

おみつおみつの家の前では、隣の家のおとみがうろうろと様子を窺うかがっていた。おみつを見つけると駆け寄ってくる。

「おみっちゃん、おかえり。遅いから迎えに行こうかと思ってたんだよ」

おみつおみつの母が亡くなってから、おみつ一人での外出は今日が初めてであった。おとみは、かなり気を揉んでくれていたようだ。

「おとみさん、たがいま。お蕎麦そばを食べてきたの」

おみつはまた、おかめにした説明を繰り返した。皆が心配してくれている事が嬉し

かった。嬉しいと思う気持ちだが、また湧いてきた事が嬉しかった。

「作次郎だよ。今から、湯屋ゆやに行こうと思つて」

「作次郎、作ちゃんだね。こんにちは。あたしはお隣のとみだよ」

おみつは端折った説明しかしなかったが、おとみは何を聞く事もなくにこにここと挨拶をしてくれた。もし何か聞かれても、おみつが知っているのは作次郎の名前だけであつたので、他に答える事はできなかつたのだけれども。

「こんにちは」

作次郎は、観念したかの様に小さな声で答えた。

「湯屋ゆやへ二人で行くのかい？ 一緒に行つてあげようか？ 着替えは？ 作ちゃんのを替えがあるんじゃないかい？ 湯屋ゆやの道具はある？ ちよつと待つておいで」

おとみは、尋ねているのに返事も聞かずに自分の家へと入つていった。

呆氣に取られている作次郎に、おみつはくすりと笑つた。

そうして、やつと作次郎の手を離し、おみつも自分の家の戸を開けると、背中に背負つていた風呂敷包みをよっこいしょと下ろした。布はなかなか重たかつたのだ。

だが、これでまた食べて暮らしていける、と安堵した。

困つた様に立ち尽くしている作次郎を見て、二人分、頑張るぞ、とおみつは思う。久しぶりに、色んな事にやる気が湧いてきた。

自分の着替えと湯屋ゆやへ行く時の桶や手拭いを準備して出ると、おとみがたくさんを着物を抱えて待つていた。

「うちの子の着物がまだあつて良かったよ。作ちゃん、使つてやつておくれ」

昨年の暮れに亡くなつたおとみの息子、大吉だいきちの着物だつた。まだ処分できずに置いてあつたのだろう。八つだつた。

「そういえば、作ちゃんは幾つ？」

「九つ」

「なら、ちよつど使えるかもねえ」

おとみは、どきりとおみつの家に着物を置いて、そのうちの一つを取ると手早く風呂敷風呂敷に包む。

「はい。これとこれを持って。草履ぞうりも湯屋ゆやで足を綺麗にしてから履こう。今は、裸足裸足で出掛けるよ」

おとみは、ちゃきちゃきと湯桶と手拭い、着替えを作次郎に持たせ、草履ぞうりも手に渡した。天気が怪しいので、傘も一つ。またしても、ぼかんとしている作次郎の手を引いて、今度はおとみとおみつと作次郎の三人で出掛ける事となつた。

湯屋ゆやは、子ども達や仕事終わりの男衆で賑わう時間の前で、ほどよく空いていた。

番台で大人一人、子ども二人分の金を払い、おとみはさっさと中へと入っていく。後へ続いたおみつと手を引かれた作次郎も中へと入った。おみつとおとみが脱衣所でちやきちやきと着物を脱いでいく傍らで、作次郎は、きよろきよると辺りを見渡していた。

「作ちゃん、湯屋は初めてかい？」

さっさと腰巻き一枚になっていたおとみが、目ざとく声を掛ける。返事もなく立ち尽くす作次郎に、おとみはにこりと笑いかけて着物を脱がせていった。作次郎は何も抵抗する事なく裸になって、おみつと手を繋いだ。

湯屋の中では幾人かが、思い思いに体を洗ったり湯船で温まったりしていた。

おとみは、ただただ驚いてあちこちを見ている作次郎を座らせ、裸足で歩いて真っ黒だった足の裏に湯をかけて擦り始める。おとみに足を洗われている作次郎の背に湯を掛けたおみつは、そのまま、その骨ばった背中を擦り始めた。

すっかり気が緩んだらしい作次郎の喉が、ひくつと鳴るのが聞こえる。

おみつは、思わずその横顔を盗み見た。目元に滲んだ涙が零れ落ちようとしている。必死で堪えようとしているのだと気付いて、おみつは、お湯を汲んできてざぶざぶと作次郎にかけた。おとみが気付かないふりで足を洗い、綺麗になったよ、と言ってくれたのを合図に湯船に連れていく。

作次郎は、うつむいてひとしきり泣いた。おみつは、黙って隣で座っていた。

「私の母上も、この前死んだ」

やがて泣き止んだ作次郎が、ぼつりと呟いた。

「そっか」

「うん」

そのまま、しばらく黙って二人で湯船に座り込んでいた。

「あんまり入っていると逆上せるよ」

おとみの元気な声に、おみつはようやく我に返った。

はーい、と返事をして湯船から上がると、二人はどちらからともなく手を繋いだ。そうするのが、当たり前のように。

「大きな風呂は、気持ち良いな」

「うん。私は小さな風呂を知らないけど」

「こっちの方が良い」

「そう？」

「一緒に入れる」

「そうだね」

「大人になっても、一緒に入って良いのか？」

「そうじゃない？」

「そっか」

おみつは、全身を綺麗に洗ってすっかり町の子の身なりとなった作次郎と、来た時と同じ様に仲良く手を繋いで湯屋から出た。おとみは、にこにここと笑って二人に付き添っていてくれた。

作次郎の鏡かった目付きは、憑き物が落ちたかの様に柔らかくなっていた。途中で、歩きながら船を漕ぎはじめた作次郎を、おみつとおとみで両側から支えながら進む。

作次郎と声を掛けると、ん、と返事をする作次郎は、器用に歩きながら、かくんかくんと頭を垂れていた。その様子がおかしくて、おみつは声を上げて笑った。

「入って、寝ながら歩けるんだね」

おみつが笑いながら言うのと、ほんと、驚きだね、とおとみも笑った。

「そういや、うちの大吉もさ」

「……うん」

おとみは笑い顔のまま、昨年の暮れに亡くした子どもの名前を口にした。

「ご飯をさ、食べながら寝てしまったり……してたよ」

「そうなんだ」

「そうなんだよ」

「おかしいね」

「ね」

こうしておとみと一緒に笑いあうのは久しぶりだった。お互いに大事な家族を亡くして、すっかりと落ち込んでいたのだ。それでも、そんな中でもおとみはずっと、母を亡くしたおみつを気遣ってくれていた。自分もつらいのに、ずっと……

おみつは、胸がきゅうと掴まれる様に感じて、また泣きたい気分になった。堪えた涙は、一人で呉服屋こくふくやから出た後で流した涙と違って、なんだか温かい気がした。

おみつの家に着いて、一枚だけの布団に作次郎をなんとか寝かせると、作次郎はもうそのまま起き上がらなかつた。久しぶりにたくさん動いてたくさん食べたおみつも急に眠気を覚えて、何をためらう事なく作次郎の隣に横になった。

「おやすみ、おみっちゃん、作ちゃん」

おとみの声に、おやすみと返事をしたのかどうか、おみつはよく覚えていない。

翠朝、早い時間にすっきりと目を覚ましたおみつは、隣でぐっすりとお眠っている作次郎を見て、ほっと息を吐きだした。

……夢じゃなかつた。作ちゃんはちゃんとここに居る。

しばらく作次郎の寝顔を眺めているうちに、空腹を覚えてくる。朝餉を作らなく

ちや、とおみつは思った。思ってから、少し可笑しくなる。

昨日の朝まではおとみに握り飯を渡され、ちゃんと食べないといけないよと叱られるまでろくろく食事もしていなかったというのに。誰かの為と思えば、自分の為だけよりもよほどやる気が出るものらしい。

おみつは、うんと伸びをして、久しぶりに煮炊きの支度を始めた。

「おはよう」

おみつが機嫌よく朝餉の支度をしていると、作次郎の声がした。少し掠れた寝起きの声は、ちゃんとおみつに向けられていた。

おみつは、嬉しくてにこにここと振り返る。

「作ちゃん、おはよう。眠れた？ 布団が一つでごめんね。昨日、大家さんに借りに行く前に、作ちゃん、寝ちゃったもんだから。私ももう一緒に寝る事にしたの」

「すまない。その、風呂、湯屋？ の帰り道辺りからあまり覚えが無くて」

「疲れてたのねえ。よく眠れた？」

「ああ。とても」

「なら良かった。ご飯、もうすぐできるから、顔を洗ってきたら良いよ。出て、少し行ったら井戸があるから。分かなかつたら待ってて」

こんなになくさん話したのも久しぶりだ。話し過ぎだろうか。けれどおみつは、う

さうきとする気持ちが止められない。顔も自然と笑顔になっていた。

「その、はばかりは……」

「ああ。そうね。行こ」

作次郎はうるさそうにするでもなく、おみつに返事をくれた。おみつは、それがまた嬉しかった。

作次郎を共同の厠かまどと井戸の場所に手早く案内すると、おみつは家に戻った。煮炊き途中の火元から離れるのが心配だった事もあるのだが、おみつには、作次郎が、長屋の者にとつて見慣れぬ者であるという意識がまるでなかったのだ。

おみつは大層浮かれていたのだろう。長屋の者達の、作次郎を見る胡亂うらんな目付きに気付かなかった。

「おはよう。作ちゃん、よく眠れたかい？」

手拭いを手に戻ってきた作次郎に、おとみが声を掛けるのが聞こえる。

「これね、持って行きな。たくさん煮たからお食べ」

おみつが目を向けると、おとみに皿を差し出された作次郎が戸惑っている所だった。作ちゃん、おかえり。あ、南瓜だ。おとみさん、ありがとう

おみつの言葉に、作次郎はようやくおとみから皿を受け取った。

「おみつちゃん、ご飯はある？」

「うん。今ね、ご飯とお味噌汁だけ作ってたから、何か小鉢を買ってこようかと思ってたの」

「待ってて。漬け物もあるんだよ」

「わあ、嬉しい。作ちゃん、これで足りるかな？ 他にも何かいる？」

おとみと言葉を交わす合間に尋ねた作次郎への問いに返事はなかったが、ちようど小鉢売りが天秤を担いで近づいてきたのでそちらへ向かう事にした。

周り中の家の戸が開いて、わらわらと人が出てくる。

「作ちゃん、見に行こ。食べたい物があつたら買おう」

「あ、私は別に……」

作次郎がもごもご言っていたが、今日、おみつは小鉢を買いたかった。

だから、作次郎からおとみの煮た南瓜の入った皿を受け取って家の中に置くと、巾着を手歩き出した。もちろん、作次郎の手を繋いで。

小鉢売りの天秤には三種類のおかずが載っていて、どんどん売っていた。おみつは作次郎に、どれにするか聞こうと目を向けて気付く。作次郎は、昨日湯屋へ行った時の様な顔をしていた。つまり、よく分かっていない時の顔だ。

湯屋に入るのが初めてだと言っていた作次郎はきつと、おみつとは育った環境が違うのだろう。小鉢売りのおかずを見るのも、初めてかもしれない。

おみつは、今日は自分の好みで貝の煮付けを一つ買った。これから、色々味見しているうちに作次郎の好みの味付けも分かってくるに違いない。そうしてから、作次郎は今日は何が食べたい？ と聞く事にしよう。

おみつは、先の事を考えてうきうきとした。

小鉢は一皿八文。しばらくは、昨日の稼ぎで食いつなげそうである。温かいご飯と味噌汁と南瓜の煮物、貝の煮付けにお漬け物。膳に並べて、ふたりで手を合わせた。ぐう、とふたりとものお腹から腹の虫が鳴って、ふたりは顔を見合せて笑った。

「いただきます」

作次郎は、やけにふうふうと、ご飯や味噌汁に息をかけながら食べていた。

熱い食べ物に苦手なのかな、とおみつは心配したが、作次郎は夢中で食べて、美味しい美味しいと何度も言っていたから、食べつけないだけだったのかもしれない。作次郎が美味しいと言う度に、美味しいね、とおみつも答えた。本当に、美味しかった。朝餉の片付けの後は、洗濯だ。夜に降っていた雨は明け方に上がったらしい。地面は濡れているし、どんよりとした曇り空ではあるが助かった。

井戸端へ、作次郎の煤けた着物とおみつの昨日着ていた着物を持って出かけていく。特にやる事のない作次郎も、おみつの後ろを付いてきた。

長屋の他の者は、食事中なのか曇り空だからか、井戸の周りには誰も居なかった。

おみつは井戸から水を汲み、たらいに入れていく。作次郎の肌触りの良い着物を、ざぶざぶともみ洗いた。水はすぐに真っ黒になって、何度か水を捨てては汲んで洗った。作次郎は、真剣な顔でじつとその様子を見ていた。

「あれ？」

洗っていた着物の袖口に硬い手触りを感じて、おみつは首を傾げた。

「ここに、何か硬い物が縫い込まれてる」

ほら、とおみつは作次郎に袖口を差し出した。

触った作次郎が驚いた顔をする。作次郎も知らなかったようだ。

「そういえば」

と、作次郎は口を開いた。

「手習いに行く時は、必ずこの着物か、もう一枚の似た様な柄の着物を着る様にと母上はいつも言っていた。何かあったら、袖口を破りなさいって」

言いながら袖口を破ろうとする作次郎を、おみつはやりわり止めた。

「待ってて」

そう言うのと、身軽に家から糸切り鋏はさみを持ってきて、丁寧に袖口の糸を切り中身を確かめる。出てきたのは一分銀いちぶぎんだった。おみつは息を呑む。

「銀貨を見たのは初めてだ」

おみつが眩くと、私も、と作次郎は答えた。

「作ちゃん、これ……」

おみつが話そうとしたところへ、長屋の者が少しずつ井戸端に集まり始めた。仕事へ行く者や寺子屋てらこやへ向かう子どもも、わいわいと各部屋から出てくる。

おみつは、慌てて作次郎の手にそれを握らせた。

「後で相談しよう。洗濯が終わるまで待ってて」

作次郎は大人しく頷いて、それをしっかりと手に握って立っていた。

井戸端が増えていく人達に適当に返事をしながら、おみつは洗濯を終えた。

作次郎の事は、今から大家さんと顔合わせだと言うと、皆一様に心得顔になった。

作次郎の名前以外を聞かれる事はなかった。

おみつが大家さんの元へ行くと言ったら、おとみは洗濯を途中で切り上げて付いてきてくれた。

「お布団も借りるんだろう？ 重たいから手伝うよ」

などと理由をつけていたが、心配しているんだろうなという事は察せられた。おとみの顔が亡くなった母の顔に重なって、おみつの鼻の奥が少しだけつんとした。途中で、当たり前前のおかめも合流し、四人で大家の住むお店の一角へと向かった。

大家は大柄な壮年の男で子どもにも遠慮はない。名前だけを告げた作次郎を上から

下まで眺めて、溜め息を吐いた。

「武家の出か？ 名字は？」

作次郎は口をつぐんでいる。

「言う気がねえって事か。戻る気がねえのか？」

作次郎は、その言葉には頷いた。

「厄介事は御免だ。匿かくまったとして長屋に責任がかかるのは困る。なんの目的でここに居る？」

「ここで、暮らしたい」

「それだけか」

「はい」

「説明も無しで置いてもらえるとと思うか。金は？」

作次郎は、先ほどの一分銀いちぶぎんを見せた。

「ふむ。これは？」

「着物に縫い込まれていた。これで、どれだけ暮らせるだろうか？」

「店賃としては、二月分ふたつきでとこか」

「二月」

わ、すごい、とおみつは思ったが、作次郎の声は少し落胆を含んで聞こえた。

「しかし、こんな大金を着物に縫い込んでいたとは何を想定していたのか。ますます状況は悪いぞ」

「母が、毒殺されました。私は、近所の火事に乗じて逃げました。父は今、江戸にはいません。捜される事はないと思います」

淡々とした作次郎の説明におみつは息を呑む。

毒殺……？ 父は今、江戸に居ない？

作ちゃんは、偉いお武家様の子どもだった？

こんな所に連れてきてはいけなかっただろうか。でも。

「ここで、暮らしたい」

おみつがぐるぐると考えているうちに、作次郎は大家に頭を下げていた。ただ深々と頭を下げて、願いを口にしていた。

「何かあれば、わしは簡単に見捨てる。わしが守らなきゃならんのは、この長屋だ」

「無論。むしろ、そうしてほしい」

「町人の孤児みなしこで良いのだな」

「はい」

ああ、とおみつとおみは同時に息を吐いた。大家はそれらを横目に、奥の部屋へ一度引っ込んで、また戻ってきた。頭を上げた作次郎の手に一貫文いっかんもんの束を乗せる。ず

しりと重いそれは、一文銭が千枚、縄で纏められた物だ。

「これは？」

「一分銀を両替してやる。あれでは使えない」

作次郎は、何かを思い出した顔で頷いた。おみつは、作次郎の当面の銭は自分がしっかりと賄うつもりであったが、それでも、作次郎の手持ちがあった事にほっとした。これがあれば作ちゃんは、自分の買いたい物を遠慮せずに買えるだろう。

「ありがとうございます。その、店賃は？」

「おみつに貰っている。一部屋で住むのだからいらん」

ほ、と作次郎が息を吐くのが見えた。

やっぱり、とおみつは思う。やっぱり、あのお金があつて良かった。なんとなく作次郎は、おみつに頼りきりになるのをよしとしない性分の方に感じていたから。

「これが無くなる前に、食い扶持を探します」

「そうしな。それと、名前だ」

作次郎、なんていかにもお武家様の子だ。町人の孤児の名とは思えない。

「作次、で切ったら良いんじゃないかい？」

おかめが口を挟む。

「分かりました」

作次郎は淡々と頷いた。名を変えられても、なんの感慨もない様に見える。

「話し方も、寺子屋に通つて覚えてこい。堅苦しいつらありやしねえ」

「はい」

「じゃ、帰んな」

話がついたとみるや、おみつとおとみは示し合わせた様に貸布団を素早く抱えて出口へ向かった。大家の気分の変わらないうちに帰りは帰ったのである。おかめは、なんの口出しも手出しもしなかった。

おかめさん、黙ってる事もできるんだ、とおみつが思ったのは内緒だ。

作次郎改め作次は、自分も共に布団を抱えておみつの部屋に戻ると、おみつとおとみにも深々と頭を下げてきた。

「よろしく願います」

「こちらこそ、よろしくね。作ちゃん」

こうして、おみつと作次のふたりでの暮らしが始まった。

夜半、雨の音で作次は目を覚ます。

べらべらの粗末な布団の上。目を凝らせば、並んだ布団におみつの無防備な寝顔が見える。

ああ。おみつが居るな、とほつとした。この人に、自分は拾われたのだ。久しぶりにまともに食事をして、風呂に入った。あんな気持ちの良い場所があったんだなあ。湯屋を思い出す。今日もおみつと一緒に入って、一緒に洗ってきた。昨日は……泣いてしまったな。

母が死んでから、初めて泣いたかもしれない。母は、食事中に血を吐いて倒れ、そのまま亡くなってしまった。呆然としているうちに葬儀は終わっていた。恐ろしさから食事をまともに取れずにいる作次郎を、家人は誰も気に留める事がなかった。

そのうちに、食べても食べなくても死ぬさ、と屋敷の留守居役（江戸上屋敷にて、幕府や大名諸家のの渉外や情報収集の任務にあたる家臣）が言っているのを聞く。

父は、参勤交代で領地に戻ったばかり。母は居ない。正室と義兄は、絵にかいた様な箱入り娘とお坊ちゃん、悪意もないが頼りにもならなかった。

側室である母が死んでとても悲しんでくれていたが、それだけだ。正室は、食中りには気をつけなさい、と指示を出した、らしい。

食中り（しゆくあ）な訳ないだろうと作次郎は思ったが、それを言う事もできない。毒だと言えば、犯人を捜さねばならなくなる。もしも犯人が分かった所で、味方の居ない子どもの自分にはどうしようも無かった。

作次郎は側室の産んだ次男坊で、母子ともに野心は欠片もないが出来が良過ぎた。

家臣達が嫡男（ちやくなん）の未来を案じるほどに。

側室は、正室を立てながら屋敷の切り盛りをしていた。嫡男には、評判の手習い（てなら）の師範を屋敷へ呼び、自分の息子は市井（せいき）の寺子屋（てらこや）へと通わせた。剣術も同様である。嫡男には、評判の剣術の師範を屋敷へ呼び、次男は町の剣術道場へ。

同じ扱いはしない、なんの二心（ふたごころ）もないと示してみせた。

ところが、大勢の中で学び競合相手が居た事で、次男坊はますます才氣走って成長してしまった。それぞれの場所で将来有望との太鼓判を押され、図らずも跡取りである嫡男（ちやくなん）の脅威となってしまうのである。

正室と側室にも、嫡男（ちやくなん）と次男にもなんのわだかまりもない。仲良くやっている。だといふのに、家臣達はそうではなかった。自分達の家の都合などもあるのだろう。

ついには側室に毒を盛り、たまたまその日、まだ食事に箸をつけていなかった作次郎は生き残った。そして、食べても食べなくても死ぬという状況なのだと作次郎が知った頃に、近所ではや騒ぎが起きた。作次郎は、これ幸いと煙の激しい方へと走り、屋敷を抜け出てきたのである。

武家屋敷の辺りを抜け出した後は、よく分からずに二日ほどさ迷った。

着の身着のままだったので、おみつに拾ってもらわねば、どちらにせよ飢え死にしていたかもしれない。

あれは美味かつたなあ、とおみつの寝顔を眺めながら思う。
二人で食べた蕎麦屋の蕎麦は、人生で一番美味かった。また、眠気に身を委ねながら、作次はうつすらと微笑んだ。

翌日、作次が大家の指示通りに早速足を運んだ寺子屋は、今まで作次が通っていた寺子屋とあまりに違っていた。まあ、やかましかつたのだ。

様々な年齢の子も達が、わいわいとそれぞれのできる事をやっている。あちこちで話し声が聞こえて、教えあったり、喧嘩したり、遊んでいたり。

師範は、子ども達が何をしていても大して介入しない。喧嘩が酷くなれば流石に仲裁はしていたが、それくらいのものだった。分からない所を尋ねられたら答えるし、うるうると歩き見て、おかしいな文字を書いている子の手直しはする。

作次の通っていた寺子屋の師範の様に、書物を読み上げては文の意味の解説をしたり、算術の解き方の解説をしたりといった授業をするわけではないようだ。

小屋の中では、年長の子が年下の子達に文字や基本の算術を教えるという形が所々に出来上がっていた。

忙しそうなおみつやおとみに付き添ってもらうのが申し訳なく、また気恥ずかしくて、場所だけ聞いて一人で寺子屋まで足を運んだ作次は、その様子をひとしきり観察

してから、はじめましてと師範に挨拶をした。おとみに教えられた通りに、今日から与兵衛長屋に住む事になった作次です、と言った。はい、こんにちは、と穏やかに答えた師範は、幾つかの質問を作次に投げ掛けた。読み書きそろばんの基本的な話だった。作次が答えると、参ったなと師範は言った。

「ここには、作次が学べる事は、もう無えようだ」
置いてある本を見ても、どうやらそのようだった。

「ここへは、どうして？」

「大家さんが、寺子屋で話し方を学んでから仕事へ出ると」

「はあ、なるほど。訳ありか」

「お前、おみつんところから出てきやがったろ？」

師範と話していると、年の近い少年がやって来てまくし立てた。

「幹太。いきなりなんだ、新しい仲間挨拶も無しに。礼儀がなっちゃいなね」

「うるせえ。仲間になんてなっちゃいなえ。なる事もねえ」

「ここで一緒に学ぶんだ。仲間だろうが」

「おいらは認めねえ」

お前に認めてもらわなくても結構だ、と作次は言いたかったが、町人としての言葉遣いで言い返せるわけがない。あきらめて、今は口を噤む事にした。

今にみてるよ、言われつばなしでなるものか、と思ひながら。

「ま、認めない奴は放っておこう。作次は出来が良いようだから、皆に教える手伝いをしてくれるか？ 暇な時間に読みたい本がありゃあ、読んでくれたら構わないよ」

「分かりました」

幹太の事はまるつと無視して、作次と師範との相談はまとまった。

なおも絡んでこようとすると師範は、師範が腕つぶしで抑え込んでいる。師範は、穏やかな物言いとひよろりとした見た目でありながら、子ども達をpushさえつけるだけの腕力はあるようだ。作次は、師範を少し見直した。

ちようどそこへ、分からない所を師範に尋ねにきたこれまた作次と年の近い少年が居た。何処が分からないのかと作次が尋ねてみると、算術の問題が出てくる。なかなか高度な事をやっていた。こんな子も居るのかと作次は少し心が浮き立った。

「説明するよ」

「ありがとう。おいら、善吉ぜんきち」

「作次。よろしく」

二人で人の少ない場所を探して、問題に取り組む。善吉は、作次が少し手懸かりをやるだけですぐに答えにたどり着いた。楽しそうに次の問題に進んでいる。

「算術が好きなのか？」

「うん。作ちゃんも？」

「そうだな。好きだな」

「え、嬉しい。算術好きってあんまりいねえから」

「そうなのか？」

「ここには、あんまり」

善吉の言葉に作次は、ずっとやかましい部屋の中を見渡して、確かにと頷いた。

「た、ただいま……」

「あ、おかえり」

作次の声は大きくはなかったけれど、おみつはすぐに気付いて縫い物から顔を上げた。朝から寺子屋てらこやへ出掛けていた作次が帰ってきたのだ。作次は、今日は挨拶だけしてくると昼飯を持たず出掛けたから、今は昼時を過ぎた辺りか。

おみつは、寺子屋までひとりで行ける、と言ひ張る作次をおとみと見送ってからは、ずっと仕事に没頭していた。母を亡くした後は、何かしていかないといられなくて縫い物に没頭していたから、やっている事はこれまでと同じだ。

だが、今日は気分が違った。一昨日、納品した品がしっかりと金子きんすになったという

喜びと自信、そして、頑張って仕事をして作次に美味しいご飯を食べてやりたい、少しでも良い暮らしをさせてやりたいという気持ちがある。今は胸のうちに。

同時に、お武家様の子である作次が、おみつと共に居る長屋暮らしのままで、良い暮らしと感じる事などないかもしれないという不安もある。

けれどおみつは、ここで暮らしたいと言った作次の言葉を信じよう、と思った。ふたりで、少しでも良い暮らしをできる様に頑張ろう。良い暮らし、というのがどういうものなのかも、まだ分かってはいないけれども。

針を縫い掛けの布に刺して、おみつはうんと伸びをした。戸口で立っている作次が家の中へ入ってこない事に首を傾げつつ、立ち上がって戸口へと足を向ける。

「おかえり、作ちゃん。お昼ご飯、一緒に食べよ」

言いながらおみつが手を差し出せば、作次は少し頬を緩めて手を取ってくれた。そして、ふたりは向かい合って座り、ご飯を食べた。

朝作っておいた握り飯と漬け物だけの食事を、美味しい美味しいと言いつつ食べる作次に、美味しいね、とおみつも返した。

ふたりで食べる食事は、本当に美味しかったから。

作次が、本当に美味しそうにおにぎりを食べてくれたから。なんだかすでに、良い暮らしが始まっている気がした。

二 長屋暮らし

なんでもない様に、日々は過ぎていった。作次は寺子屋で揉まれていたうちに、早口でまくし立てられる言葉にもついていける様になった。

「お前、いつまでおみつんとこにいやがるんでき。とつとつ出ていきやがれ」

「何処に？」

「そんな事、おいらが知るかい」

「出ていくところがねえから置いてもらってるんだ。そんな事も分からねえのか」

「なんでそれがおみつんとこなんだ？ 迷惑じゃねえか」

「何処なら迷惑じゃねえんだ？」

「知らねえよ」

「幹太は、頭が悪過ぎて心配になる。何が言いたいのか、さっぱり分かりやしねえ」
主に幹太とのやり取りが役に立ったようだ。

相手の言葉の裏を読んだり、言われた言葉の意味をよくよく考えたりする必要もない。幹太は、大してなんにも考えちゃいないのだから。

なんで幹太が絡んでくるのか、作次にはよく分からなかったが、善吉が言うには、「幹太はおみっちゃんの方が好きだから、近くに居る作ちゃんに腹が立つんじゃないかな？」

との事だった。

そういう事なら受けてたつ、と作次の舌鋒はますます冴えわたる。作次は、おみつを好きな気持ちでは誰にも負ける気は無かった。

作次と幹太の口喧嘩は、今では寺子屋名物となっていた。

あつという間に二月が過ぎて、おみつの不安をよそに、作次はすっかり長屋暮らしに馴染んでいた。寺子屋では、作次は師範の手伝いをしているのだから何も払わなくて良いと言われたらしい。手元の金にあまり余裕のないおみつと作次にはありがたい事だった。

作次は、たまに師範から手伝いの駄賃をもらってくる事もあった。師範が付け届けとしてもらって食べきれなかった野菜や甘い菓子などだ。おみつは、作次と半分こして食べた甘い菓子の美味しさにいたく感動して、作ちゃんは本当に師範の手伝いをしてるんだなあ、すごいなあとしみじみ思った。

これだけ読み書きそろばんのできる作次だ。すぐにでも仕事は見つかるだろう。

一緒に居られる時間は残り少ないのかもしれない、と考えるとおみつは少し寂しい気持ちになった。

作次は、洗濯やご飯作りの支度も積極的に手伝ってくれていた。なんでも、ふたりでやると楽しいな、と言う作次に、おみつもうんと頷いた。

おみつが仕立てた品を納めに行く時も、ふたりで一緒に荷を運んだ。帰りには、当たり前のように二人で蕎麦を食べた。すっかり馴染みとなった蕎麦屋では、今では二つ頼んで食べる様になった。

「作ちゃんは、あれだね。理想の旦那って奴だよ」

「ほんとにねえ。うちの旦那に爪の垢でも煎じて飲ませたいもんだ」

「え？ 何？」

井戸端で洗濯しながら、長屋のおかみさん達がわいわいと喋る。

「家内の仕事も協力的で、頭も良くて男前。おみっちゃんの旦那は、良い男だねって言ってたんだよ」

「え？ え？ 作ちゃん？」

「そうそう」

「え。旦那じゃないよ。私達まだ、子どもだもの」

「ま、そうなんだけども」

「そういや、そうだね。いやもう、若夫婦のつもりだったよ」

「ええー？」

「ま、作ちゃんは良い男だねって話さね」

「あ、うん。ありがとう」

あはははは、と笑い声が響く。ま、旦那じゃないけど家族ではあるなあ、と思いがらおみつは軽い返事をして、おかみさん達と一緒に笑いあった。

「大店の呉服屋が丁稚を探してるんだが、どうだい？」

そんな話が、ちらほらと流れてくる様になった。

作次は、もちろん早く手に職を持って、おみつに楽をさせてやりたいと思っている。読み書きそろばん、なんでも得意な作次には、商人はうってつけかもしれない。けれど、どんなに給金が良くても譲れない事がある。

「通いで行けるとこかい？」

「いや、住み込みだ」

「おいらは、この家から離れるのだけは嫌なんだ。通いじゃない仕事は受けねえよ」

「生意気言いやがって。まあ、分かっただけだ」

そんなこんなで、作次が幾つか住み込みの奉公を断つた後、小間物屋の手伝いの話

がきた。

小さな店らしい。元々行商でやっていた主人が、足を怪我して長時間歩けなくなつたので思い切つて小さな店を構えたところ、えらく人気が出たとの事だ。夫婦二人では商売が厳しくなつてきたので人を雇いたい、という話だった。

「おいらで良ければ」

作次は二つ返事で引き受けた。

早速、連れてこられた店は、なるほど小さな物であった。店先には、所狭しと簞や櫛、手拭いに巾着袋、化粧道具に姿絵まで売っているなんでも屋だった。

「色々あるんですね」

「ああ。置いて売って欲しいと色んな人に頼まれているうちに、こうなつたんだ。仕入れの手間も省けて良いっちゃ良いんだが」

そうやって説明を受けている間に、作次やおみつより二つ三つ年上かと思える娘が一人、巾着袋を幾つか持つてやつて来た。

「清兵衛さん、これ」

「おう、おせきちゃん。この間のがまだ残つてるんだが、幾つか売れているかい？」
店主の清兵衛が言うと、おせきと呼ばれた娘が自分で確認を始める。二つ残つていたので、三つ売れたようだと言告されて、清兵衛が銭を持ってきて渡した。

「また、五つ置いていくね」

「はいよ」

作次は、そのやり取りを見て、口約束だけなのかと吃驚（びっく）してしまう。

「清兵衛さん。帳面に付けたたりしないのかい？」

「ああ。やるうとしたんだが、物が増え過ぎてよく分からなくなっちゃってね。置いた人に、幾つ売れたか言ってもらっているんだよ」

「増えたからこそ、きちんとしなきゃ。誤魔化されても分からなくなるぜ」

「あだし、そんな事しないわ」

「あなたがするって言ってるんじゃないやねえんだよ。自分でも幾つ置いたか忘れちゃう事もあるだろ？ 書いとけば、お互いに安心して商売できるじゃねえか」

「いや、こりゃしつかりした坊主が来たなあ。実はあつしは帳面を書くのが苦手」

「おいらがするから、帳面をおくれ」

「助かるよ」

帳面を受け取った作次は、日付とおせきの名前と置いた品、数を記入していった。

その後も、どんどんと人が来ては品物を置いていったのを書き付けていく。昼には、ひっきりなしに買い物客が来て、作次は大層忙しく過ごした。

中でも特に、流行りの読本を元に想像で描いた登場人物の姿絵が、飛ぶ様に売れて

いた。

「これが流行って、大忙しになったのさ」

清兵衛と妻のおきくに説明されて、へえ、これがねえ、と作次はその絵をしみじみ眺めた。作次には、実在の人でもない、物語の登場人物を描いた姿絵を金を払ってまで買い求める人の気持ちは理解できなかったが、店が繁盛するのは良い事だ。商売なんだから、売れてなんぼであるう。

そうして作次が働く様になってから、清兵衛の店は更に繁盛した。姿絵の一つの少年剣士と作次がそっくりだと評判になったのである。

まるで、人気の役者を一目見ようとする様には人だかりができた。人が集まれば、姿絵以外の品までよく売れた。

はじめは戸惑っていた作次だったが、品物がよく売れて、思っていたよりたくさんきんずの金子がもらえると知ると、商人は何を利用してても売れたら勝ちだと腹をくくった。

「ただいま！」

いつもより少し遅い時刻に仕事から帰ってきた作次が、戸口で弾んだ声を上げる。

「お、おかえり？」

作次が、仕事帰りに弾んだ声である事は珍しい。

おみつは驚きながらも笑顔で返事をした。仕事は順調だ、と作次は毎日おみつに言っていた。実際にそうなのだろう。作次が初めて貰ってきた金子は、おみつが想像していたよりずっと多かった。なんでも器用にこなす作次の事だ。奉公先で、さぞかし重宝されているに違いない。

それでも、いくら口では順調だと言っても、仕事から帰ってくる作次はいつも疲れていた。そりゃあそうだ、とおみつは思う。

作次は、お武家様の子だったのだ。おみつ達にとって当たり前である事が、作次には当たり前でない事もあるはずだ。仕事に出たら殊更、そんな場面は多いはず。

けれど作次は、困った事や上手くいかなかった事をおみつになんにも言わなかった。ただ疲れた顔で、なんにも心配いらねえよと笑っていた。

もしかしたら、作次には本当になんにも困った事はなくて、ただ疲れていただけなのかもしれない。それならそれで良い。でもたまには、疲れたあつて一言、弱音を吐いてくれても良いのになあとおみつは思うのだ。

「おみっちゃん、手を出して」
「ん？」

今日は珍しく、疲れなど微塵も感じさせない明るい顔付きの作次に言われるまま出した手の上に、簪が一つ乗せられた。

「え？ 作ちゃん、これ……」

「おみっちゃんに似合いそうだと思うてさ。その、あんまり上等な物じゃねえんだけど……」

長屋のおかみさん達に男前だと評される顔が、少し赤くなった。

作次が言いよどむなんて珍しい。

「良かったら使ってくれろ？」

おみつは、ぼかんと口を開けて手の上の品を見た。

簪だ。おみつはまだ持っていなかった簪。

母は、一つだけ持っていた簪をとでも大切に使っていた。

おみつが物心つく前に亡くなったと聞いている、おみつの父からもらった物だといつだったか教えてくれた。母の形見として残してあるそれを、大きくなったら使わせてもらおうかと思っていたけれど。

「え？ ええ？」

上等な物かそうじゃないかなんて、おみつには分からない。分かったのは、真つ赤な布で可愛らしい毬がかったどつてある簪が、とても好みだった事だ。

作次が、おみつに似合うと買ってきてくれた簪。

これ以上に上等な簪がこの世にあるだろうか。

立ち読みサンプルはここまで

「あ、ありがとう。本当に、ありがとう、作ちゃん」

吃驚して、それから嬉しくて、おみつは声を詰まらせながらお礼を言った。

「そのうち、もっと良いのを買ってくるから」

「ええ？ 良いよ。これが良い。これをずつつけるからこれで良い」

「あ、うん。そっか？」

機嫌よく笑う作次の目の前で簪を頭に挿し、一生大事にしよう、とおみつは誓った。

稼いだ金で、可愛い簪を一つ買っておみつに贈る事ができてから、作次の笑顔には更に磨きがかかった。

「作ちゃん」

と、呼び掛けられれば愛想よく手を振り、増える女性客に笑顔で対応した。

「てえしたもんだよ、作次は」

夕刻、店を閉めて片付けをしながら、店主の清兵衛は作次に声を掛けた。

「へ？」

「あんなに女性客に囲まれて堂々としてるなんて、あつしには無理だ」

「小さい時から男前だと、慣れちまうもののかねえ」

清兵衛の妻のおきくも、真面目な顔でそんな事を言う。

「おいら、男前なんですかね？」

「男前だよ。言われた事ないかい？」

「あまり覚えがねえけど」

「そんなわけないやね。言われてても、気付いちゃいねえんだろう」

「あの姿絵も、おいらは似てるとは思わねえんだけど。……似てるんですか？」

「ああ、よく似てる。作次をひな型にしてるんじゃないかねえかな。あの絵を描いているのは、おまえさんと同じ与兵衛長屋の住人だからね」

「ええ？」

作次は、同じ長屋に絵師が居るとは知らなかった。

「絵師なんていたんですね」

「ああ。絵の仕事で食っていきねえからって外に働きに出て、その仕事もまあ絵付けではあるんだが、やりたいのは絵付けじゃねえって、空き時間に絵を描いてたらしいんだ。描いても世に出す手段がねえとしゃほくれてたのを見掛けてね。うちで置いてやると預かったところ、売れて売れて」

「でも、おいらは会った事ありませんよ」

「最近、見掛けねえから心配だったんだよ。絵も売り切れちまつたし、また描いてほしいんだけどねえ」